LOVE&ふぁんたじー!!

闇璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＶＥ＆ａｍｐ；ふぁんたじー！！

【Ｎコード】
Ｎ１７２６Ｚ

【作者名】
闇璃

【あらすじ】
『運命の歯車が噛み合った時、俺の日常は動き出した』

世界の命運は俺に懸かっている！？
なんてのは大げさだが、それぐらいの気持ちを込めて言おう。

「どうしてこうなった！！」

巻き込まれたらそこでスタート。

彼の物語は、ありえない方向に曲げられた。

プロローグ（前書き）

どうも、闇璃です。
初の投稿と言う訳ではなく、気ままに書いた小説を引っ張って乗せました。
出来れば読んで欲しいと思います。
そして、感想を下さい。
ダメなところとか教えて欲しいです。

プロローグ

「おぬしのお陰じゃ！！」
「はい？」
「これで、私も晴れて自由の身じゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「……あるぇ」
もしかして、俺は……
とんでもない間違いを犯してしまったのだろうか。
「ふはははははははは」
「うん、間違ったんだろうな」
本当に間違えてしまったようだ……
いや、分かってはいたさ。
コイツと関った瞬間から、俺の平凡な人生が無くなる事なんて。
「ふははｈｈｈｈ……。っは、柄にもなく興奮してしまったぞ」
「まぁ、これが俺の分岐点か」
納得するのもどうかと思うが。
「何の話じゃ？」
「んや、こっちの話だよ」
本当にこれからどうなるんだろう、この世界。
いや、俺の人生か。
かなりありえない方向に曲がったわけだが。
「そういえば、私の家がないのじゃな。おぬしが壊したし」
「そうだな、もうこんなボロボロ神社じゃなくていいから、むしろ良かったんじゃ？」
「ボロボロ言うな。意外と愛着はあったわ。……そうじゃな、暫くおぬしの家に住まわせてもらおう」
「……は？」
「さっそく出発じゃ！！」
そう言ったアイツは、かなりのスピードで階段を降りて行く。

「おい、ちょっと待てよ！！」
「こうなったのも、おぬしの責任じゃ」
『ちゃんと、責任とってもらうから
……
よろしく頼むぞ♪』
そう言って振り向いたアイツの笑顔は、むかつくぐらい可愛かった。

プロローグ（後書き）

次に期待できましたら、ぜひお気に入り登録を……。
でわ。

第一話『自称神様？』

学校のＨＲ終了後、悪友からこんな話を聞かされていた。
「なぁなぁ、知ってるか？」
「ん？」
「願いが叶う、ボロボロ神社の話」
「何だソレ？」
新しいオカルトの類かよ……いや、新宗教か？
急にそんな話持ってこられても、意味不明でしかないんだが。
「本当に強い想いを持っていけば、その願いが叶うらしいんだよ」
「あっそ」
強い想いねぇ……
叶えたい願いはあるにはあるが、こんな願い叶うわけ無いしな。
「おいおい。本当らしいんだって」
「じゃあ逆に、どこの神社なんだよ」
「確か、幻神社」
幻神社ってどっかで聞いたことあるな。
「あぁ、俺ん家の姉妹神社か」
「そうなのか？」
「うん。なんでも別の神社というか、予備？みたいな神社だったはず」
「どういう意味だ？」
「そいつ、２箇所に神社あるんだよ」
「あぁ、なるほど」
そういや最近、アイツに全然会ってないな。同じ学校のはずなのに。
「まぁ、会う意味も無いんだが」
「何の話だ？」
「こっちの話だよ。とりあえず、俺は帰るわ」
「そうか、引き止めて悪かったな」

「いや、いいよ。おもしろい話聞けたし」
そう言って俺は校門に向かった。
さっきの奴は俺の悪友で、名前は常葉（つねは）　優馬（ゆうま）。
優馬とは高校に入ってから知り合った。
俺と同じ、高校生活平凡組み……と言いたいところだが。
優馬には彼女がいる。しかもかなり可愛い。
俺も優馬もどっちかと言うと、美形に入るんだが。
どうしてか、俺には彼女が出来ない。
「このリア充め。本当になんでアイツだけ……」
愚痴ったところで、意味は無いがなんとなく愚痴ってみる。
「誰がリア充よ。それと何が私だけ？」
「何だ、聞いていたのか」
「聞こえたの間違いよ」
こいつはさっき話しに出てきた姉妹神社の、跡取り娘の巫女で名前は神ヶ鷺（かみがさぎ）　弥御（みおん）。
姉妹神社だけあって、こいつとは幼馴染である。
「そうか、まぁ気にしないでくれ。んで、今帰りか？」
「そうよ、今日も神社の仕事があるのよ」
「お互い苦労するな」
「そうね。今日はちょっと急がないと行けないから、もう行くけど」
弥御はまた、仕事なのか……俺は遅くからでも問題ないなのにな。
忙しい奴だ。
「あぁ、悪い引き止めて」
「そう思うなら。こんど何か奢ってもらうわよ」
「考えとくよ。じゃあな」
「えぇ、それじゃあね」
追記。弥御は隙あらば何かを奢って貰おうと考える、図太い女である。
容姿はかなり可愛いほうに入るだろう。学校でもかなりの人気があるらしいし。

お前は恵まれている。とかよく言われるけど、そうか？って言うのが本音である。
「やっぱり、気にしたら負けだな」
そんな事を考えながら帰っているわけだが、先ほどの話が頭から離れない。
「まぁ、試しに行ってみるか。どうせ、嘘だろうけど」
俺は幻神社に向うことにした。

おっとここらで、俺の自己紹介をしておこう。
俺の名前は、源（みなもと）　夜死経（よしつね）。
「まったく、ふざけた名前だ。親のネーミングセンスを疑うぜ」
みんな俺の名前は、義経と思っているみたいだが、残念ながら夜死経である。
「俺も小さい頃は義経と思っていたけど、違うんだから笑うしかなかったな」
神社にあった、伝書によると。俺は源　義経の子孫に当たるらしいが、多分嘘だろう。
義経の子孫は存在するらしいが、多分苗字が一緒なだけで先祖が流したデマに違いない。
「本当にかなりいい加減だな」
というか、誰に意見を求めているやら。独り言とか、かなり頭が逝ってる奴じゃないか。
そうこうしている間に神社の階段に到着した。
長いんだよ、ここの階段。
鍛えているから、全然楽勝だけどな。
ふーそんなこんなで到着。
で、目の前にあるのが例の神社か……
かなりボロボロだな。鳥居はあるが、賽銭箱はない。あるのはちょっと小さい本殿だけか。

「てかこれ、何時壊れてもおかしくないだろ」
よく大丈夫だな。何年前からあるのやら。
「さてと、そんな話は色々置いといて」
本当に願いが叶うのかね。
強い想いを持っていけば叶うって話だが。
「持って行くって具体的に何しろと」
普通にお願いするのか？本殿に入るのか？　取り壊すのか？
「……最後のはありえないとして。とりあえず、最初の２つをやってみよう」
まず一つ目。
手を3回叩いて、お願いしてみる。
……何も起らないな。
じゃあ次。
本殿に入ってみる。
……開けて入ってみたが、何も起らない。
「んー何も起らないな」
というか、強い想いの定義が分からないんだよな。
想いか……。
「やっぱ、わかんねぇや」
てか、ここまでして叶えたいのかって言われれば、叶えたいんだよな。
俺にとっての唯一の願い……。

『世界を変える力が欲しい！！』

冗談じゃないんだよな……これ。
なんでか知らないけど、昔から叶えたい願いはこれだった。
何か心の奥で引っかかるものがあるんだけどな……。
「何なんだろうな……」
本当に何か大切なものを忘れている気がする。

「それは、想いじゃろうな」
「！？」
今、頭の中に声が響いたような……。
「勘違いか？」
「違う違う。私はここじゃ」
「ここ？」
よく周りを見渡してみる。
すると、ボロボロな本殿の中が眩く光っていた。
「ここか？」
俺は半信半疑で扉を開ける。
「正解じゃ。そのまま入ってくるが良い」
その声に惹かれるまま。本殿に入っていく。
そして、そこにいたのは……。
「私は神様じゃ！！　まぁ、万能の神じゃなくて。幻想の神なんじゃ」
そこにいたのは……。
「まぁ、私の声が聞こえたと言うことは、お主にはきっと資格があるのじゃ」
そこにいたのは……。
「あんたかなり痛いな！！」
「いきなりなんじゃ！！」
頭のねじが存在しない。自称神様だった。

第一話『自称神様？』（後書き）

第一話。
ここではまだどういう話か掴みにくいと思います。
また、ダメなところとかありましたら感想ください。

第二話　『雉も鳴かずば打たれまい』（前書き）

ばばーんと2話目。
うん、特に言うことはない。

第二話　『雉も鳴かずば打たれまい』

「んで、お前がかなり痛い奴なのは分かったんだが」
「だ・か・ら。嘘ではない！！」
「じゃぁ逆に聞くけどさ。神様って言う位なら、何かしてみてくれよ」
「ふむ、それもそうじゃな」
そう言うと、自称神様は何かを考え始めた。
一体、何をやらかすのか……どうせ、何も出来ないだろうに。
「よし。今から消えて見せよう！！」
「はいはい、やってみろよ」
見栄張っても無駄なのにな。
「ふん、今に見ておれ……えい」
「……え？」
自称神様は気の抜けた掛け声と共に、いきなり何も無しに俺の前から消え去った。
「おいおい、嘘だろ。夢なんてオチはないよな」
頬をつねってみても、どうも痛い。夢じゃないようだ。
「だから言ったろうに……私は神様じゃと」
「本当に神様なのか？　少なくともまだ信じ切れていないんだが……」
「だ・か・ら。本当じゃと言ったのに、お主が信じないから」
「いやいやいや。普通いきなり神様だ、なんて言われても信じれるわけないだろ！！」
こいつが仮に本当に神様だとして、いや……人間だったとして、今のこいつの状態は説明が付かない。
声が聞こえるだけで、気配も、姿もまったく見えないからな。
「そうじゃな、信じなかった罰に悪戯でもするか～」
「ちょ、お前待てよ！！　見えないからってな！！」

「ふん、罰じゃからな。さてと、とりあえず……」
「グハッ！！」
いきなり頭をどつかれた。しかも、かなり強く殴りやがったな。
「雉も鳴かずば打たれまいじゃ」
「こ、こいつ……」
「さてと、改めて自己紹介をすると、私は『万能の神』じゃなくて『幻想の神』なんじゃ」
「いきなり自己紹介かよ！！」
「気にしたら負けじゃ」
「……もういいよ、進めてくれ」
「うむ、私は幾万と存在する神の一人なのじゃ」
なんか昔どこかで、神は何人も居るとは聞いたが……こいつもソレの一人なんだろうな。
とりあえず分かったことは、こいつが本当に神だと言うことだ。
「今更だけど、お前名前は？」
「あぁそうじゃったな。言っていなかったか。そうじゃな、私の名前なんじゃが……」
こいつが名前を言おうとした瞬間、何か分からないが俺の頭の中にイメージが流れてきた。

「お前、名前は？」
「名前なんて無い。ただここに居るだけ」
「名前が無いのか……それなら、私が付けてやろう」
「あなたが？」
「あぁ。私の名前は源　義経」
「義経様……ですか」
「そうだ、だがしかし、様なんて付けないでくれ。そこまで出来た人間ではない」
「……」

「それに、お前は神様なのだろう？　ならば私が様をつけなければならない」
「私こそ、そんな柄じゃないです」
「じゃあお互い様だ」
「そうですね……」
「しかしなんだ、ここで出会ったのが運命なんだろう」
「運命？」
「あぁ、私とお前はここで出会う運命だったんだ」
「そうですね……運命なのかもしれません」
「さてと……どんな名前がいい？」
「お任せします」
「人に名を付けるの初めてなのだがな」
「私は人じゃないんですが」
「それもそうだったな。っと話がそれてしまったな、それでお前は何の神なんだ？　名前の参考にな」
「私は……人の想いから生まれた、幻想の神です」
「幻想か……それならば」

「「幻」」
そう、こいつの名前は幻（まぼろし）。
「お主、本当に……懐かしい」
「俺もだ。お前を知っているわけじゃ無さそうなんだがな」
何だろうな……誰だかは思い出していないが。
いや、知っているとは思わないんだけどな。
「いや、お主は知っておる。私のことを」
「そうなのか……あまり覚えていないけど。今、お前の名前だけは確かに思い出したのか」
「そのようじゃ。まぁ、おのずと時が経てば思い出すであろう」
「思い出す？」

『うむ。お主は、私の名づけ親なんじゃから』
そう言われても俺は、嫌な気分じゃなかった。それより、どこか懐かしい気がした。

第二話　『雉も鳴かずば打たれまい』（後書き）

アクセス数が伸びると嬉しいかもしれない。
なんでもいいから感想とか……成長のために悪い点を。
次話は製作中。
何時になるかは未定。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1726z/

LOVE&ふぁんたじー!!

2011年12月7日23時49分発行